

本田 好美 Yoshimi HONDA

『刺線』 銅版画 エッチング、アクアチント w:375mm×h:270mm

何か人前で発表したり、注目を浴びた時に向けられる無数の視線たち。人に見られることに対し緊張し震えが止まらなかったり、自分がどう思われているのか分からず勝手に悪い方へ考えて恐怖を持つことは、今まで幾度となく経験しましたが未だに慣れません。

その経験を踏まえて、『怖いもの』というテーマからこの作品を制作しました。

鑑賞者が怖いと思うかは私には分かりませんし、怖いと感じようが感じまいが、それは自由です。

大橋 麻耶 Maya OHASHI

『小さな村の少女』 銅版画 エッチング、アクアチント w:180mm×h:220mm

『海とヨット』 銅版画 エッチング、アクアチント、手彩色 w:295mm×h:215mm

作品の題材を考えているとき、過去の記憶をたどっているつもりでも、そのとき自分が感じている空気や光、匂いなど、さまざまな要因が影響していると感じます。作品は、いつか出会った旅の風景やそこで暮らす人たちの何気ない日々を、現在の空気や光と重ねて想像した『遠くて近い場所のこと』です。

永井 愛 Ai NAGAI

『孤独な遊泳』 銅版画 アクアチント・手彩色 w:200mm×h:150mm

『魚 石』 銅版画 エッチング・アクアチント w:78mm×h:62mm

『石の夢』 銅版画 エッチング・アクアチント 各w:70mm×h:70mm

私は自然界のものが持つ精気や生命力から、目には見えない「何か」の存在を感じる。私はその存在を感じると落ち着き、安心感を得られる。

私を包み込み受け止めてくれる、オーラにも似たその存在を描いていく。

岡谷 敦魚 Atsuwo OKANOYA

『three point』 銅版画・リトグラフ・手漉き和紙 w:300mm×h:300mm×d:60mm

画面には、3つの点がある。この作品においては、存在と非存在と境界面(interface)としての3つの領域を象徴している。相容れないはずの対立する領域が、境界をもうけることで等価の3つの点となる。

わたしたちの
絵画

長岡造形大学
美術・工芸学科
絵画コース
優秀作品展

栗山 典子 Noriko KURIYAMA

『願い』 シルクスクリーン 鉛筆、岩絵具・板 w:585mm×h:726mm

この作品は、人間として生活している「日常」と、もしも鳥となって生活出来たらという「非日常」をテーマに描きました。鳥のモチーフは、人間の生活にとけ込んでいて集団を作る生き方をする種が良いと思い「鷺(さぎ)」を選びました。作品の上半分は、鷺になれた後の日常を描いたもので先に進んでる集団に早く追いつこうとしている情景です。

外見は変わっても、マイペースな性格で客観的にみて遅れをとりやすいという自分自身の内面までは変わらないという所を表現しました。

西片 結花 Yuka NISHIKATA

『葡萄』 コピー、コラージュ w:915mm×h:660mm

日々、何気なく接する野菜や果物を題材にしている。食べ物の持つ生命観や、食べた時の喜びを表現している。

制作においては、まず水彩やアクリル絵具で原画を描く。その後パソコンやコピー機で加工している。反転、繰り返し、ネガによって変化が生まれる。単純だが、いつも私に予期しない新鮮な驚きと発見の楽しさを与えてくれる。

高野 梓 Azusa TAKANO

『風花』 水彩・色鉛筆・紙 B1

風花(かざはな)は天気がいいのに雪が降っていること。
昼間ならそれに気づきやすいが、夜は暗くてなかなか気付かない。
けれど雪が降っていても星は頭上で輝く。
大切なクマ(大切な存在)にも気付いて欲しくて、一緒に外へ出た。

森田 千尋 Chihiro MORITA

『蛇口』 油彩・キャンバス F30号

『窓辺』 油彩・キャンバス F30号

私は、希望を大きなテーマとして作品の制作をしている。
さびれた空間の一部を切り取り、描く。そこに差し込むやわらかな光や、水のきらめきに、私は希望を感じる。その希望は小さいけれど、優しく、それでいて悲しげで、またしたたかさも持っている。
自分自身の心の中に見つけることのできる、小さくても確かな希望の光を描いていきたい。

庭野 真梨子 Mariko NIWANO

『ユメウツツ』 油彩・キャンバス w:1,460mm×h:1,510mm

私は意識と無意識の間にある「曖昧な意識」をテーマに絵画制作を行っている。現在は「眠気を帯びた意識の曖昧さ」を軸に、自身の世界を展開させている。

神林 祐紀 Yuki KANBAYASHI

『瞳を閉じて』 油彩・キャンバス F50号

心の海からは、泡のように未知の発想が生まれ、雲のように上昇気流に乗って世界を彩る。
目を閉じて瞼の裏に描く世界は、あらゆるドグマが通用しない、人間だけに許された自由であってほしい。

齋藤 しほ Shiho SAITO

『葬 式』 油彩・キャンバス F30号

『カラスと少女』 油彩・キャンバス F30号

子どもは、純粹でとても愛らしく弱い存在である。しかし、それに相反し純粹であるが故に残酷さ、怖さ、狂気を秘めている。私は、愛らしくもあり不穏な要素を感じられるものに魅力を感じる。

小杉 美紀子 Mikiko KOSUGI

『雲』 油彩・パネル w:1,455mm×h:1,033mm

現実にはあり得ない理想の世界が、あり得るかもしれないと追い求める私の心情を、手の届かない雲に投影しました。

その世界では時間はゆっくりと流れているように感じられ、前に何処かで見たことのあるような懐かしさや寂しさがあります。

和久井 礼子 Ayako WAKUI

『季節は過ぎてゆくけれど』 油彩・キャンバス F50号

空気が澄んで紅葉が始まると外の光は煌めく。過ぎ行く時間を気にせずお茶を飲むのは最高のひととき。秋は一瞬なのでキャンバスに留めておこう。

小林 真弓 Mayumi KOBAYASHI

『君と私は、同じ、じゃないけど』 油彩、油性ペン・キャンバス F50号

私と友人のこと。性格も生き方も考え方も違う。その違いに戸惑ったり、悲しくなる。理解できずに、苛立つこともある。けれど離れがたいし、一緒にいたいと思う。

江原 正美 Masami EHARA

『シンボル』 水彩、油彩・木製パネル w:800mm×h:910mm

『死』をイメージしながらも過度の記号化と装飾的表現でモチーフの意味をぼやけさせて現実感のない死を表現しました。